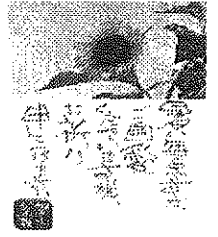


働こう障害者も 働けるんだオレ達も

2000年8月30日発行

発行責任者
藤田勝春
編集責任者
田澤幸子



こぶしだより



今月の紙面

- ①特集(1〜2P) 第二けやき作業所
- ②くらし(3P) すずらんの悩み?・新任のこあいさつ
- ③(4P) 共作連に参加して・保護者会長あいさつ
- ④なかま(5〜6P) けやきポーンナス交渉・なかまの声
こぶしキャンプ
- ⑤保護者・こよみ(7P) こぶし山崎さん
- ⑥考える(8P) ども

社会福祉法人
こぶしの会

* 法人事務局
こぶし作業所

☎ 321-0902 栃木県宇都宮市柳田町 1401
TEL 028(662)1911 FAX 028(662)1912

* けやき作業所
* デイサービスセンター

☎ 321-3304 栃木県芳賀郡芳賀町 祖母井 2244
TEL 028(687)1040 FAX 028(677)5789

* 第二けやき作業所

☎ 321-3303 栃木県芳賀郡芳賀町 稲毛田 1532
TEL 028(677)0495 FAX 028(687)4818

* グループホーム
ときわ荘

☎ 321-0954 栃木県宇都宮市元今泉 6-14-20
TEL 028(662)5533

* グループホーム
すずらん

☎ 321-3304 栃木県芳賀郡芳賀町 祖母井 2305-2
TEL 028(677)4430

「今、何故、精神障害者の無認可作業所を始めたか！」
高橋温美けやき作業所長に聴く

〈最初に、7月から第2けやき作業所が開所しましたね。〉

高橋 おかげさまで。これも稲毛田小学校を無償貸与していただいた芳賀町、開設まで手をとり励ましていただいた県東健康福祉センターや芳賀郡精神障害者家族援護会をはじめとする関係者の皆さんのご協力のおかげです。この場をお借りしまして改めて御礼と感謝の意を表したいと思います。

〈まず、何故、精神障害者の、無認可作業所を始めたのか、そのきっかけを聞かせて下さい。〉

高橋 こぶしの会はそもそもどんなに重い障害があるうと、作業所の門戸を開いてきたという伝統を持っているのですが、その延長線上に障害の種類にこだわらないという、共同作業所全国連絡会の運動の中では当たり前の事なんです。そうした構えがあります。さらに、けやき作業所開所の頃は全障害の相互利用が制度的に認められてきた時期と重なり、ごく自然に精神障害の仲間が入所してきたんですね。

〈そうは言っても、精神障害者に対する偏見は厳しいものがあつたのではないのでしょうか。〉

高橋 そうですね。情報としては、家族のなかでの誤解のみならず、地域からの偏見、病状が安定し社会復帰可能な人でも長期に入院している制度上の問題、自立したくとも家族には受け入れてもらえず、地域にも自立を支援する社会的資源が全くといっていいくらい無いことなど精神障害者の不幸な実態をなんとなく聴いてはいましたが、けやき作業所のなかでも、当たり前前の事ですが様々な不安が返ってきました。

〈どんなふうになつたのか、ハードルを越えてきたんですね。〉

高橋 ひとは、われわれの楽天性でしょうか。そもそも社会福祉の制度とくに精通していたり、精神障害者そのものについてはもちろん、精神障害者のおかれていた社会的な状況を正確にしていれば、二の足を踏んだかも知れませんが、困っていたら何とかしてやろうという心意気というか、そんな彼等に対する共感みたいなものに突き動かされて始まったのではないかと思います。職員会議や保護者・後援会での説明もそんなもんだつたと思いますよ。

もうひとつは、またまたこぶしの伝統が出てきますが、まず、彼等をありのままに受け止めるという職員の姿勢があつたとおもいます。そんな人間関係の中で精神に障害のある仲間たちがみえる安定し、自分達の力を発揮していったという経過の中で、職員や周りの人たちも自然に理解を進めていったのではないのでしょうか。もちろん、

職員が専門家の講義やビデオでの学習したり、自主的な研修・学習の中でさらに彼等や家族に対する共感をより確かなものにしていったということも大きな力になつたとは思います。

〈第2けやき作業所が無認可で始まって5ヶ月、県の補助事業として2ヶ月目に入ったわけですが、実践を踏まえて感想をお聞かせ下さい。〉

高橋 あらためて大変な仕事だなあと感じています。そして、それはとりもなおさず「精神障害者を持った不幸と、(制度の貧困な)日本に生まれた不幸」という精神障害者の現状を反映しているのだと思います。

例えば、法外の小規模作業所の補助金額は知的障害者の半分以下です。これは法内になつてもその格差は縮まりません。精神障害者の福祉が叫ばれてきたのが20世紀も終わる寸前になつてからです。それまでは彼等は隔離収容の人生だつたという事実を見ても分かります。

さらに、こうした現状を変えていく主導的な力となるべき、父母の高齢化がひとつの課題になつてくるような気がします。当事者の運動がとてもしっかり進んでいくという事情が大きいでしょうね。精神



障害は20歳前後に多く発症するといえます。ですから両親はそのときすでに50歳に近づいているわけですが、症状が落ち着いて自立が課題になるころには高齢になっている場合が多いのでは無いでしょうか。こうした精神障害者の未来は地域の理解、特に私たちや後援会の皆さんの支援なくして解決が不可能だと思いますね。

〔なる程、第2けやき作業所（精神障害者の作業所）をこぶしの会こそやらなくてはならないというわけですね。〕

高橋 放っておくことはできないでしょうね。「こぶし」の性分として。精神障害自体が人口の1パーセントの発生率といわれているんですが、芳賀郡の人口比で1500人と推計されます。そんな在宅の精神障害者の実態が、ごく身近に数多く見えてきたんですね。「前の家の〇〇ちゃんは高校二年生の頃から家に閉じこもったままだ。」とか、同じような生活を続けていた家族からの電話相談とか、それは深刻な内容でした。

〔さて、今後、けやきは精神障害者の分野でどんな方向で進んでいくのかお聞かせ下さい。〕

高橋 仲間ひとり1人の人生をたどると正直いって少々たじろぐこともあります。それはけやき作業所を始めた時と同じことで彼等の一生をどのように形作っていくのかを考えると、その困難さ、複雑さに増々その観を強くするわけです。しかし、今回は第2けやき作業所の職員たちに励まされスタートしました。その中で、あらためて思うわけ

ですが、たった1年のけやき作業所の実践ではあります。私たちが心がけてきたこと。つまり「成人期というにふさわしい生き方を本格的につくりだしていきたい。」という思いです。確かに、精神障害者の皆さんは特段の支援や配慮が必要です。しかし、そのことで本人の人間としての生活を少しでも値切つてはいけなれないと思います。ちよつと抽象的ですが、地域や社会に支えられながらも彼等の言っている「未来を切り開きたい」という願いを掛け値無しに本物にしていきたいと思います。

〔もつと具体的には。〕

高橋 そうですね。第1に、地域に埋没している彼等と家族の願いを掘り起こす仕事を創つていきたい。具体的には、生活支援センターをなんとかも確立する。2つ目は、彼等の働くことを支えていく拠点を確固たるものにしたこと。小規模を法内化し、就労支援の体制を強めていきたい。そして、地域の中で当たり前に自立して暮らしていくという、グループホームや福祉ホームをふくめた住居問題のとりくみでしょうか。

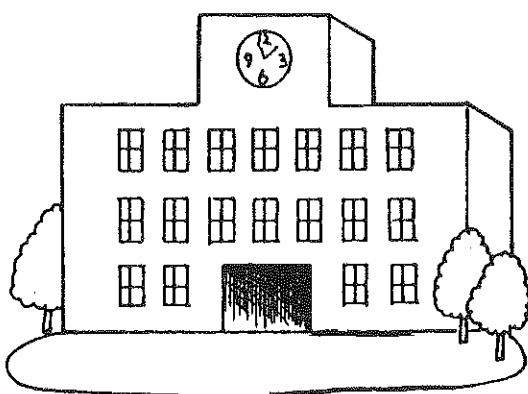
〔それでは、最後にひとこと。〕

高橋 すでに触れましたが、精神障害者問題の解決には地域社会全体の理解と援助が不可欠だと思います。その点で、これは「こぶし」のお蔭といつていいと思いますが、後援会（保護者会を含む）の役割は大きいと思います。単に、財政的なきつかけだけでなく、福祉の地域づくりの先頭に立つ存在として発展させていくことが求められてい

るのではないのでしょうか。いまは、各作業所の利益代表組織的なところもありますが、現在のこぶしの会全体はもとより、全ての障害者問題に視野を広げ、こぶしの会の理念を支える組織として脱皮していくことが求められていると思います。その意味で、今年の事業計画にある「新たなこぶしの会の長期計画」にこぶしに関わる全ての力をあつめて、心を一つにしていくことが大切になってくるんだと思いますね。

どうもありがとうございました。まだまだお伺いしたいのですが、また中間報告的に特集を組んでいきたいと思えます。

インタビュア 本誌編集委員 伊藤寛



すずらんの悩み？

「今回は半年の試行的開所を経て、一年半が経過した「すずらんの家」について、仲間を声を交えながら報告し、これからの展望などについて述べていきたいと思えます。」

最近のすずらんの仲間は悩み事が多いようです。「何をどうしたらいいかわからない」と心配事がある毎に話す仲間がいます。その都度心配事が無くなるようじっくり話していますが、なかなか納得がいかずいろいろな職員をつかまえては聞いてもらいう生活が続いています。彼女にとっては「聞いてもらおう」ということが一つの薬となっていて、傾ける場所があるので、仲間も仲間なりに耳を傾けているようです。

また、お盆休みはすずらんの家は休所になりましたが、ひさびさに実家に帰ることで「家の人と喧嘩したらどうしよう」「なんか言われたらどうしよう」と悩んでいた仲間も「言葉遣いがきれいになったねと親戚の方に言われた」とうれしそうに話していたり（私が特に指導したわけではありませんが）、「盆も正月も帰らなくてもいいよと少々きつめに言

われた」とぼろぼろ泣く仲間（家の方たちは冗談で言っている）と私は信じたいですが）が居たり、「親戚の人が遊びに来ると思ったら来なかったよ」と寂しそうに話す仲間が居たりと様々な夏休みを過ごしたようです。その中で問題となったのが休み中の仲間への生活援助です。食事作りや金銭の管理等心配な面がたくさんあります。生活支援センターのような設備がこれからのこぶし・けやきに求められているのでは…と休み中自分が援助できない中で感じました。

(G・H すずらん 切無沢)

新任のごあいさつ

こぶし作業所所長 田澤幸子

この7月から、こぶし作業所の所長に就任いたしました田澤と申します。そしてあらためて住谷前所長の業績に敬意と感謝を申し上げます。責任の重さをひしひしと感じております。このお話をいただきました時に、ほんとうに自分のような者に務まる役割ではないと固辞したのですが、まったくそのとおりで、これから先、作業所に通う仲間たちをはじめ関係する皆さまにどのような損失を与えてしまおうのかを考えますと身の縮む思いです。

どうぞ、ご指導のほど、お願い申し上げます。

ところで、施設長の責任とは何か。当然のことながら、第一に、こぶし作業所に通う30人の大切な仲間たちの自立を支えることへの責任を痛感しています。自立支援とは、仲間たちが自分の人生に関心をもち、自分の力で判断し、生活していける力をつけていくことだと考えています。もちろん、その前提には、周囲の人々の力を借りながら自分の生活をつくっていく、相互に支えあうという考え方があることはいうまでもありません。20年の積み重ねのうえに立つて、改めて自立支援の視点で作業所の取り組みを見直すことが求められているように思います。

第二に、仲間たちの生活を支えるためにも、県内で初めて通所授産施設サーピスを切り拓いてきたところとして、他の多くの障害のある方や、その保護者の方々の相談窓口をはじめ、地域福祉推進の拠りどころとしての役割があると考えております。

日常の地道な実践を積み上げる取り組みと、さらに、多くの方々との力を合わせて現状を少しでも改善していくための、内外の二つの取り組みがますます必要となってきました。微力ではありますが、職員ともども努力してまいります。どうぞ皆さまのお力をおかしくださるようお願い申し上げます。

初めて全国大会に参加をして、たくさんの人たちが作業所で働いていることがわかりました。仕事の内容は、主に自主製品でパン・クッキーなどが多くありました。その他には、下請けの仕事や廃品回収、袋詰め、園芸の仕事、みんな頑張って仕事をしているように思いました。他にも私たちの知らない仕事もたくさんあり、驚きました。給料の方も少ない人では三千〜四千元、多い人は一万〜四万円でした。しかし、他の人達も今の給料では、満足していませんでした。今は不景気なため、あまり仕事が無く、給料も下がっているという声も聞きました。でも、みんな頑張っていると思います。もつといい仕事したい、もつと給料をもらって自立したいと希望に満ちていて立派だな、例えば障害があっても健常者と同一人の人間だと実感しました。私も、この大切な経験を生かし、何事にも負けることなく頑張っていきたいと思えます。

(けやき 小林 秀子)

私が聞いてきた話は「恋愛と結婚」です。いくつかの質問をして聞いてみた所、まず「障害者同士が結婚して幸せですか？」と聞いてみたら「幸せです。」と答えてくれました。「結婚して生活費などは月々いくらかかりますか？」という質問に「月々に二人の給料プラス障害者年金で三万くらいで食費も入れて七〜八万かかり、家賃の方は約三万くらいで給料の方は七万くらいもらって生活をしています。」と答えてくれました。その中で私が話を聞いて思ったことは、障害者でも人を好きになつたりしてもいいのじゃないかということです。例えば、その人が障害者でも健常者でも恋愛は自由なんじゃないかと思えます。障害者は障害者同士で恋愛をと思うのは、障害者を一人の人間として見ないと思えず、誰を好きになつてもその人の自由だと私はこの共作連に行つて思いました。

(けやき 諸橋 優子)

共作連に参加して ～和歌山～ 参加者の声 (けやき編)

私は、重度重複障害の分科会にレポートを持って参加しました。北は北海道から南は九州まで各地方からの参加者がたくさんいて、各施設の様々な話をきくことができました。レポートも重度重複障害者の作業のことだけでなく、レスパイトや生活施設建設などについても報告され、様々な方向から様々な考え方を聞くことができました。決して近いところとはいえない和歌山でしたが、有意義な時間をすごせたと思っています。

(けやき 宮岡)

共作連全国大会のなかまの分科会に参加しました。様々な作業所の発表を聞いてきましたが、その中でも、東京にある「リサイクル洗びんセンター」の仲間の自治活動の発表を聞いてきました。分科会に参加し感じたことは、以前の全国大会に比べて、今年は意見が多く出て、自分の勉強になりました。

(けやき 直井 信也)



「いぶし」保護者
会長あいさつ
(岸 銀悦)

暦上では立秋でも残暑続く毎日です。この度私が皆様方の選出により役員をお受けしました。

私の子供が入所してから約二十年。その間職員、役員の皆様には並ならぬ努力があつたと思います。これから先も職員、保護者先輩方々の指導のもとで頑張つて行きますので宜しくお願い致します。

保護者の皆様、我々は仲間です。皆同じ気持ちです。『和』と『望』で頑張つて行きましょう。

最後にいぶし作業所発展のため職員の大いなる活躍と期待を致しまして挨拶と致します。



けやき保護者
会長あいさつ
(逆井 典子)

今年度、保護者会会長をさせて頂いたことになりました。年々会員数も増え、これからの保護者会活動のあり方も考えさせられることもありますが、皆さんに助けをいただいで、仲間のために前向きで楽しい保護者会活動ができたらうれしいです。行き届かないところもあると思いますが、よろしくお願致します。

なかまの要求

「今年こそは要求を通すぞ！」と意気込み自治会役員会で話を始めたのが五月下旬のことでした。このころは毎週のように役員会を開いては共作連全国大会やボーナス交渉についての話し合いをしていました。

ボーナスに関しては昨年は要求通りに支給されなかったため、「今年こそは！」という思いが仲間の中で強く、役員全員が積極的に仲間一人一人に要求を聞いていきま

した。仲間の人数が多くなった分要求も様々になりました。「給料の〇ヶ月分欲しい」とか、「〇万円欲しい」お金だけじゃなく「〇〇が欲しい」等の物の要求も出てきました。又、その場での返答が難しい仲間に関してには職員が間に入り、ゆっくりと時間を掛けて要求を引き出していきましました。自治会役員会でまとめてみると、まさに十人十色と言う言葉がぴったりでした。

七月中旬になると仲間の要求をまとめ、検討し、ボーナスの支給を給料の一・五ヶ

月分とするという要望書にしました。その要望書を役員が自治会代表としてけやき作業所所長に提出しました。その二日後に解答書がけやき側から提出され「ボーナスの支給を給料の一ヶ月分とする」という内容でした。これに対し、自分達の要求が全てではないが通ったことに仲間たちは喜びました。

しかし、自治会はこのことに満足はしていません。なぜなら仲間一人一人の要求は様々で少しでもみんなの要求を満たすべく今後も活発に活動をしていかなければならないという課題が浮かび上がってきたからです。その課題解決のため、けやき自治会の奮闘は続いていくのです。

(けやき 田村)

ボーナス要望書
高橋所長様
お礼状に近づき、又今年もボーナスこの
頃の時期を過ぎました。
22日にお集まりの水後役員会でボナ
スについて話し合いました。
仲間の人数に聞いてはる人々の人が
少なく2万円、多くて4~5万円のボナ
スと言つ声があり、1.5ヶ月分のボナ
ス要望書が話し合いになりました。
中には10万円がほしいと要望する
人も、それにボーナスをもらたう、何
を買いたいのかどの様にしようかと聞

なかまの声

〈夏休み明けの朝の会で・・・〉

「夏休みはどうしたの？」

滝口 「出かけた！」

「どこにいったの？」

滝口 「デパート(福田屋)に行った！」

「何したの？」

滝口 「CD買った！」

その後、思わず体を動かし踊ろうとしていました。買った曲はラップだったので・

「夏休み何したの？楽しかった？」

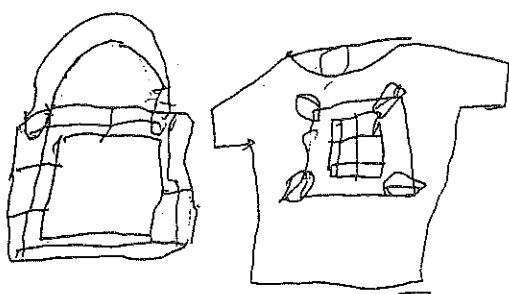
星野 「(嬉しそうに)うん」

「どこに行ったの？」


星野 「(嬉しそうに)うん！」

上三川の盆踊りに行って来たそうです。その後、にこにこ夏休みのことを思いだしてました。

私は下読でかんがえて
 花水沼のあつ 広瀬智也



1,9150円
 たかしまの えです



広瀬智也

夏といえば、やっぱりキャンプ！
 というわけで、こぶしでは七月十八日か
 ら十九日（希望者は二十日まで）の日程で

夏だ！キャンプだ！



キャンプを行いました。例年ならば、五月半ばには実行委員会を組織してキャンプの取り組みを開始するのですが、本年は諸行事が重なり、実行委員会の組織が六月中旬までずれこみました。

慌ただしい中での実行委員会でしたが、今年「電車に乗ってキャンプに行こう！」とテーマを決め、キャンプの中味だけではなく、行き帰りの過程も楽しもうと仲間・職員で話し合いを重ね、下見でも県内・県外を比較検討し、烏山町の「サンライズ国見」に決定しました。

今回のキャンプでは、仲間のやりたいこと、往きの鉄道利用や烏山町内散策を取り入れ、仲間がキャンプへ行く過程も楽しめる日程をつくりました。

キャンプも終わり、仲間に来年のことを聞いてみると「来年も電車で行きたい！」「来年はフォークダンスをしたい」「カレーコンテストはもういい」などの声がでました。二泊組キャンプもゆつたりとした日程で好評でした。来年度は実行委員会を早めに組織し、またみんなで楽しめるキャンプになればと思っています。

（こぶし 東岡）

おむすび

雄司は今年二十歳になります。雄司を育ててきて辛かった、大変だった事が無いと言えは嘘になりますが、その時その時沢山の人次に支えられここまでやってこられました。

特に家族の支えは強いものでした。小さい頃は入退院の繰り返しで、私は家に帰れませんでした。子供たちは、自分のことは自分でやり「寂しい」と言ったことは、一度もありませんでした。学校の送迎で、子供たちに「いつてらっしゃい」「お帰りなさい」と言葉をかけてあげられなかったことが不憫でした。

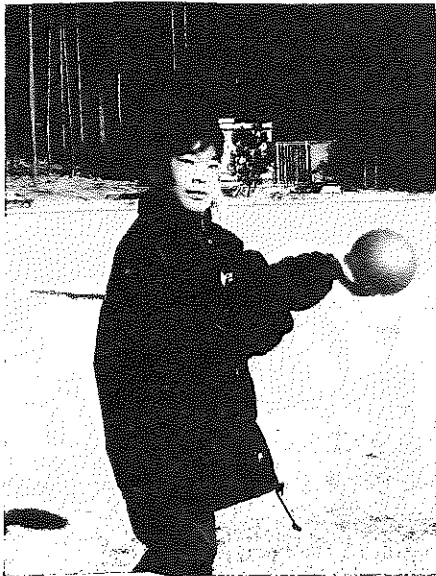
今、雄司は私達家族の宝です。家族全員、雄司を中心に動いています。時々、子供たちが不平不満を言い出すことも有りますが、話し合うとわかってもらえます。

私は、どこに行くときも三人一緒に連れて行きました。障害者の団体行事にも参加しました。そのせいか、誰にでも優しくでき「障害者だから」「健常者だから」といった考えはないようです。次男（定治）は高校生のボランティアグループに入り活動しています。娘（良子）は学校で困った人がいると助けてあげているようです。

家庭の中でも私が出かける時など、快く二人で雄司の面倒を見てくれています。二年前のことですが、雄司がてんかん重責発作を起こしたときなどは、普通だと救急車になど乗りたくはないと思いますが、次男は自分から「雄ちゃんのこと心配だから」と言つて雄司と救急車に乗つて病院にいつてくれました。娘は、入院の準備をしてくれました。その時こそ「兄弟がいて良かった・・・」とつくづく感じました。

現在雄司は、こぶしに行くことが楽しみで、毎日元気に通所しています。こぶしの仲間には、いつも優しくしてもらい親として感謝しております。まだまだみなさんに迷惑をかけるのですが、いつしか一つでもいいから雄司にも、できるものが見つかればと願っています。

（こぶし保護者 山崎富子）



9月 こよみ

- こぶし作業所
- 2日（土）職員会議
 - 9日（土）指導会議
 - 14日（木）ポリシヨイサーカス招待
けやき作業所
 - 2日（土）ケース検討会議
 - 7、9日 生活施設GH交流会
 - 9日（土）マロニエ緑化祭
 - 16日（土）職員会議

ど あ

「一冊の本とこぶしの実践」
以前から気になっていた本が何冊かあつて、作業所と家を持ち歩いていたが、ようやく読むことができた。そのうちの一冊は「障害者・家族・専門家の共働」である。

「何があなたの助けになりますか」
この本は、アメリカにおける「障害者」がその障害の重さに関係なく実際にコミュニケーションや家庭で暮らし、普通の職場で働き、余暇を楽しみ、人々との連合の世界がもてるようにするために、専門家や支援団体等が、障害者や家族に「何があなたの助けになりそうですか」「分かりません。私

たちがどうしたらあなたにとってもっとも助けになるのか分かりません。それを一緒に見つけましょう」と言いながら取り組んできた実践報告の講座録である。

〈アメリカの知的障害者をめぐる動き〉

アメリカの、この十五年位の知的障害者をめぐる新しい動きは、①施設退所とコミュニケーション支援の発展②家族支援の発展③援護就労（一般企業等での就労）の発展にあるという。もうそんなことは分かりきっている、反対に、実現不可能なことばかり言っていて、という両方からの反論が聞こえてきそうであるが、とにかく、実際の話なのである。

重度知的障害で、一方の腕と両下肢が動かず、ことばによるコミュニケーションの難しい男性が、四十七年間の施設での寝たきりの生活から、生まれた地域にもどり、一人の障害者と二人の障害のない男性と小さなアパートで暮らし、使える一本の手と腕で仕事（州保健福祉部の事務所で、紙の断裁とコピーとりとホッチキスどめ）をしているのだ。この他にも「エツ」と思うような実践が数多く紹介されている。本人の潜在的な力をひきだし、本人の意向に沿って一歩一歩環境を築いていく報告である。本気と誠実さで、本人と家族を支える実践であり、何のために、何に焦点を当てて、そのためにどんなしくみをつくるのかを確かめながらの取り組みである。

〈こぶしの実践と家族支援の基本〉

実は、こぶしの会のスタートも、この二十五年の取り組みもこぶしが基本であった。芳賀町にあるけやき作業所が、『在宅にとって無くては困る、

当てになるところです』というお褒めの言葉をいただいたが、数々の不十分さにもかかわらず、その本気さと誠実さが伝わったのかと、素直に喜んだ。

ところで、先日こぶし作業所のできごとである。キャンプファイヤーが終わろうとしていたそのときに突然パラパラと雨が降ってきた。と気づいたときには、家族が参加しているメンバーは、その場に誰もいない。雨にぬれるのを心配した親がものすごい勢いで連れ去ったのである。そのときには、正直いつてなにか起きたかわからなかったが、後でよく考えると、生まれてから今日まで一瞬たりとも気をぬかずに、体調の変化を気づかしながら育ててきたことを思った。キャンプでの雨の思い出も、本人にとっては捨てたものではないのかもしれないと思っていた自分の中途半端な理解の仕方がお粗末である。ああ、ノーマライゼーションというのは障害者だけではなく、家族のあたりまえの生活がいかに多くの制限を受けているか、そのところを深いところで受け止めてはじめて、本人自身が決定していく力をつけるために、家族と力を合わせることが可能になるのだと実感した。家族支援とはそこが基本なのだ。外側からの専門家の知識で家族の考えを批判することは、何の力にもならない。『どうしたらいいのか、一緒に考える』。重たいことばである。ところで余談になるが、先日ある方から『保護者会という名称はおかしいですか。彼らは、たとえ親子の関係ではあっても保護される対象ではないでしょう。家族会ではないですか』。なるほど、である。

〈障害の重さとは、何か〉

さて、もう一つみなさんと一緒に考えてみたいのは、先のアメリカの例ではないが、障害が重いということとは、どういうことなのかである。こぶし作業所の仲間たちは、周囲の微妙な気持ちをよく理解するし、表現もする。問題は受け止める側なのである。これも自慢のだが、わが副所長の、ことばのない仲間たちとの会話は絶妙である。たくさんさんの選択肢を次から次に繰り出すことによって、会話がどんどん弾むのである。同時に仲間たちは、他とのかかわりによって、ことばの選択だけではなく、考えや行動の選択も学んでいくのだ。小さな選択のチャンスと経験が、自己決定の力につながるのではないだろうか。障害の重さとは、より援助を必要とするということであって、何もできないということではないこと、これもまた実感させられている。障害の重さは、支えるしくみをがっちりつくることによって解決に近づくのであり、だから本気や誠実が大切なのではないか。作業所で働くことが最終目標ではない、もつと生活の幅を広げて考えてみることに、高齢期の生きがいも考える。簡単なことではないけれど、夢を実現に移してきたこぶしの会が本気になったらどんなことができるのだろう。現場は、世界の先進的取り組みにもっとも直結している、そんなことを考えさせられている。新米所長の学習途上のお恥ずかしい一文である。

参考：「講座 人間と福祉―障害者・家族・専門家の共働」(慶応義塾大学出版会)

(こぶし 田澤)

掲 示 板

ボランティア 募集中!

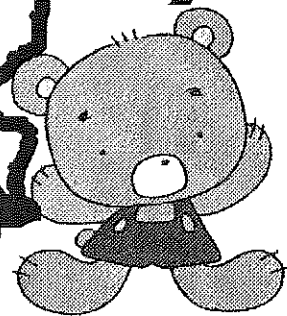
こぶし・けやきと一緒に
楽しく仕事をしませんか?

共同作業所
全国連絡会賛助
会員募集!

<連絡先>
栃木支部事務局
けやき作業所

こぶしバザー
10月9日(月)
二荒山境内にて
ただいま品物受付中!
お待ちしております!

けやきまつり
開催日変更のお知らせ
平成12年9月10日
↓
平成12年10月1日になりました。
ご来場お待ちしております。



にこにこパンやまん

注文票をFAXにてお送りいたしますので、お気軽にご連絡下さい。

こぶし・けやき後援会
会員拡大に御協力下さい!

ご連絡はこぶし・けやきどちらでも
けっこうです。宜しくお願いいたします。



粉石けん
1.2kg箱入
¥270
1.2kg袋入
¥240
固形石けん
2個入
¥100
ご注文いつでもo.k!

好評発売中!

ふふ石けん